

願牛寺報

浄土真宗本願寺派茨城西組 大高山證誠院 願牛寺

No.3



2016
お盆号



親鸞聖人御像

大高山證誠院願牛寺

「悪人正機」の教え②

教えにそむく身勝手な私たち

前回とは別の切り口で、今回も「悪人」の意味を説明したいと思います。

仏教はインドでお釈迦様がひらかれた「さとり」とその教えから始まりました。お釈迦様の教えは、人々が人生で抱く様々な苦悩の原因を突き止め、それを取り除き、さとり(静かな心)を得る道を説くことにありました。

さとりを得るためにまず大切なことは、お釈迦様の教えの基本である「諸行無常、諸法無我」ということばで示される「全てのものは常に移り変わり、変化しないものはない」という教えを理解することから始まります。

言葉としては簡単ですが、全てのものは常に移り変わる

ということ、四季の移り変わりなど自然界の変化などイメージし「なんだ、そんなことならわかっているよ」という方もきつとおられるでしょう。しかし、このことは、

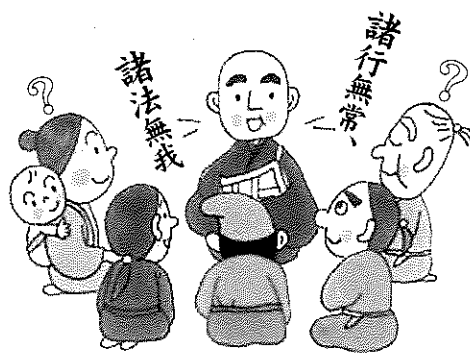
四季とか自然界のことだけに適用されるものではありません。あなた自身や、あなたが大切にしていることについても当てはまる教えなのです。それを、どこまでご理解いただけているかが非常に大切なことなのです。

ある壮年の方とお話したときのことです。「仏教の知識として、そういう教えがあることは知っているよ。けれども、自分にはあてはまらないと思うな。僕は妻や子供を大切に思っている

し、皆もそう思ってくれている。今、仕事も順調だし、生活も充実していてとても幸せだ。家族といつまでもこのまま一緒に暮らしたいと思っているよ。そりゃ、いつか問題は起きるかもしれないさ、でもね、これまでだつて問題はあつたが解決できた。これからだつて、きつと解決できるはずだ、多分どうにかなる」ということでした。

この方の場合、いろいろ苦勞もされ、社会的にも成功をおさめ、充実した局面にありました。家族の存在も、充実した生活も、一緒に暮らすということも、ご本人にとつての願いがかなえられ、大変望ましい状態にあつたかと思われます。又、これまでも困

難はなんとか凌いできたという自信もあります。だから、不安もあつたでしょうが何となく将来も大丈夫と考えておられたのでしょうか。仏教の教えより自分の力(自信)の方をはるかに信頼していたわけですから、仏教はいらないものなのだと思います。



えられるという夢を追って生きています。それは活力を産み出す力ではあるのですが、それだけを考えて生きていくと、予想外のことが起きたときに、どうしたらよいか途方にくれ、深い悲しみや苦しみや絶望の淵に立たされてしまうのです。自分にとって都合の悪いことには、目を背けているという意味では、普段私たちが多かれ少なかれ同じような考え方をしているのではないのでしょうか。

苦しみの代表の一つである生老病死を身近な例として考えてみましょう。

私たちは生き物である以上、「病めるときも、老いること分かつています。そして、自分も例外ではないことを知っています。でも健康で、長生きしたい気持ちから離れられないのです。

テレビなどで、健康や長生きや、若返りに関する情報があふれているのも、求める人が多いからでしょう。

だれもが分かっている生老病死というものに対してですら、結果的に一時しのぎにしかならない健康、長生き、若返りの「薬や策」に走ってしまっている自分がいます。

一時しのぎに執着するのではなく、苦しみでさえも乗り越えていける力を与えてくれるのが仏の智慧です。生きていれば多かれ少なかれ、たいいていの人は苦しみに出会います。その時、どう感じ、どう生きるかが問われています。

苦しみを受け止め、それが自分にとって必要なことであつたと感じられるように「自分のここを耕して、苦を乗り越えていく道を示すのが仏教の解決策」なのです。それに気が付かされていただくことが「仏の教えに出会う」ということです。

現実の私たちの生き方は、仏教の教えを深く理解し、自分の生活に活かすというのではなく、目をふさぎ、ますます遠ざかるような生き方をしているといえるのです。

このように、苦悩を除くためには、教えに向き合うことを勧められているのに、教えに対して正面から向き合おうとせず、一時しのぎの策で避けることばかりを考え、あまり根拠のない自己の思いなど頼りにはならぬことを重視し、迷い、結果的に仏教にそむいている私たち。これが、どうしようもない私たちのありのままの姿だと、親鸞聖人はご自身のことも含めて、見抜かれました。

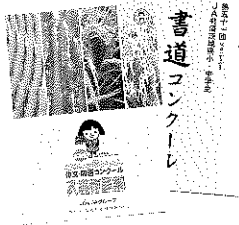
本来、私たちにすくいを与えようとしている仏の教えにそむき、耳をふさぎ勝手なことをしているということから、私たちの姿を「悪人」と示してくださいているのです。ですから、悪人とは私のことをいうのです。

男女の差も、年齢の老少の差も、経験や知識の多寡も、貧富の差もまったく関係がないのです。「私たちみんなが悪人」という見方なのです。

(弘眞)

梅澤花怜さん、文部科学大臣賞と金賞に輝く!!

1月15日、全国農業協同組合主催による第40回「こはん・お米とわたし」作文・図画コンクールの表彰式が行われ、ご門徒の梅澤哲雄さんの孫花怜さん(岡田小5年)が作文2部で文部科学大臣賞を受賞、又、第51回JA共済茨城県小・中学生の書道コンクール(条幅の部)で金賞を受賞されました。おめでとうございます。ここにその作品を掲載させていただきます。



◆第40回「こはん・お米とわたし」作文・図画コンクール
【文部科学大臣賞】
白いご飯に願いを

私の祖父は六十七歳。今年に入り「リンパ」という所に「ガン」が見つかりました。建ちくの仕事で、毎日あせだくになり、いつも家では、ご飯を大盛で食べていました。そして

「花怜、ご飯はしっかり食べるよ。ご飯は一日のエネルギー。パワーストーンが出るようにな。」と決まってくれました。

その祖父に病気が見つかった以来、祖父は病院の点できのみで、全くながら食べられなくなっていました。体はやせ細り、日焼けで真っ黒だった肌は、真っ白。祖父の顔には、笑顔も消えていきました。私はそんな祖父を見て、涙が止まりませんでした。祖母は、何とか少しでも元氣になれば、と祖父の元氣のもとであつたご飯を食べさせようと、まずはおもゆから、そしておかゆになり、少しずつ食べられるようになりました。

「今度は、まぜご飯が食べたいな。」と祖父は元氣を見せ始め、顔色も良くなり、病院の先生もおどろくほどでした。

「花怜、じいちゃんのリクエスで、じいちゃんの好物のまぜご飯を作るから手伝って。」と祖母に言われ、私は一緒に作ることにしました。竹の子やキノコ、ニンジンや油あげなど細かくきざみ、味つけをして、白いほかほかしたご飯にかきまぜます。

「花怜、白いご飯の一つぶ一つぶには、たくさんの神様がいてんだよ。じいちゃんの病氣が良くなるように、心をこめて、願いをこめてかきまぜてね。」

と祖母の顔をふと見ると、祖母の目には涙があふれていました。私は、心をこめて、願いをこめて、ていねいに作りました。

「お米の神様達、じいちゃんの病氣が良くなりますように。」
そして、私と祖母の願いが白いご飯の神様達に届いたのか、祖父は少しずつ良くなり、一時退院もできるようになりました。

家族全員が久しぶりそろそろ食卓での食事で、テーブルいっぱい料理がならべられました。その中でも、祖父はほんわり湯気がたつ、ホカホカした真っ白いご飯を食べながら

「ご飯ってこんなにおいしかったんだな。みんなで食べるご飯はすごくおいしいな。」と涙目になりながら笑顔で言いました。食卓は静かでしたが、家族みんなの笑顔であふれていました。

私は今まで、当たり前のようにご飯を食べていましたが、ご飯のパワーはすごいな、と思いました。そして、ご飯を見るたびに思うようになりました。ご飯一つぶ一つぶがみんなを元氣に、幸せにしてくれる。そして、お米の神様達へ。

「家族みんなの笑顔や幸せを運んでくれて、ありがたう。どうか、祖父の命が少しでも長く続きますように。」

【金賞】

◆第51回JA共済茨城県小・中学生書道コンクール
健全な心
五年 梅澤花怜

雁 嶋 (がんじま) の 図

江戸時代の大高山願牛寺案内図



二十四輩順拝図絵 (竹原春泉齋画 1803年)

雁嶋は今も寺の北西の水田のなかにある史跡です。雁嶋についても親鸞聖人ご滞在時の伝説があります。

昔はインド伝来の考え方で、女性は不浄で往生はできないという考え方があり、その考え方に悩んだ獵師の妻の話です。この獵師の妻は「動物の命を奪って生活の糧を得る仕事をしているし、自分は女性であるので、きつと地獄行きだ」と嘆いていたところ、親鸞聖人から「女人であろうと、たとえ殺生を行っていたとしても念仏の教えに従って念仏を称えれば往生できる」とお示しをいただき、不安が解消しました。往生が間違いないとの喜びの御礼として、獵師の妻は飼っていたおとりの雁を親鸞聖人に献上しました。親鸞聖人が雁の足に「嶋」とかいた紙をつけて放すと、沼に飛んでいった雁が着水した途端に水中から嶋がブクブクと浮き上がったというのです。この嶋は毎年春や秋に現れ、飛んできた雁が羽を休める場所になったことから、人々は沼に毎年生じる嶋を雁嶋と名づけ、親鸞聖人の奇跡としたというものです。

この図は、沼に生じた雁嶋の様子を、旅の僧侶が見物しているところを表しています。現在、雁嶋には、高祖聖人関東最初雁嶋御旧蹟と刻まれた寛政元年の石碑が建っています。

注) ご覧の絵は、森光英夫画伯に彩色していただいたもので原画には色がありません。